

待遇行動にみられる韻律的特徴について

—平均ピッチの相違を中心に—

全 賢善

キーワード 待遇行動 待遇表現 待遇意識 イントネーション ピッチ

1. はじめに

敬語の使用をわずらわしく思い、それが簡素化されることを願う向きも多からう。しかし、敬語マニュアルが絶えず出版されている現実を目を向けた時、日本語の世界から敬語が消えてなくなることは想像もつかない。吉岡（1986、1999）の調査は、言葉づかいの乱れが懸念されている若者においても敬語に対する支持率が非常に高いことを示している。¹

敬語研究は、狭い意味での敬語の研究から、広い意味での敬語、すなわち卑罵語などを含む待遇表現の研究へと発展してきた。待遇行動は、多くの場合、話し手と聞き手を前提とした音声言語行動としてあらわれるものであるから、言語表現形式だけを考察することによって待遇行動が万全に解明されることは期待できそうにない。このことは、表現形式が非常に丁寧であっても話し手の意図が必ずしも非常に丁寧に伝わるとは限らないという事実から明らかである。事実、待遇表現はパラ言語表現、²および非言語表現と密接不可分な関係にあるということを看過してはならないのである。

本稿では、待遇行動を、「話し手の聞き手または第三者に対する待遇意識がパ

¹ 若者の言葉づかいの乱れ、特に待遇表現の誤用と非用に対する非難と懸念の声は高まりつつある。しかし、若者自身は待遇表現の存続を強く求めていると吉岡（1986、1999）は報告している。吉岡の、高校生の敬語に対する意識調査では、「敬語を知らない」と、現代社会でもやはり困ることが多い（93%）、「敬語は相手を思いやる心から生まれるものであるから、現代にも必要である」（80%）、「敬語は人間関係をうまく調整するものだから、これからの世の中にも必要である」（74%）など、敬語の必要性を肯定する意見が極めて高いという結果が出ている。

² パラ言語表現は音声表現をさし、発話の声の高さ、速度、強さなどをその構成要素とする。そして韻律的な特徴は、アクセント・リズム・イントネーション・ポーズなどにあらわれる（洪1993：14）。このうち、アクセントとイントネーションが声の高さ（ピッチ）に関わる。

ラ言語表現および非言語表現を伴った行動」と規定する。その上で、待遇行動にみられるイントネーションの特徴を明らかにしようとする。

2. 先行研究

2-1. 待遇行動

辻村（1992）は待遇表現を次のように定義している。

待遇表現とは、表現主体（話し手または書き手）が表現受容者（聞き手または読み手）或いは表現素材（話題の人物）と自らの間に尊卑、優劣、利害、親疎等どのような関係があるかを認識し、その認識を言語形式の上に表したものである。（p. 131）

このように辻村のいう待遇表現が言語表現形式に重点をおいた概念であるのに対して、蒲谷（1998）は待遇表現を次のように定義している。

ある「表現意図」を持った「表現主体」が、「自分」「相手」「話題の人物」相互の「人間関係」や、「場」の状況を認識し、「表現形態」（「音声表現形態」あるいは「文字表現形態」）を考慮した上で、その「表現意図」を叶えるために、適切な「題材」「内容」を選択し、適切な「敬語」を用いることによって「文話」（「談話」あるいは「文章」）を構成し、「媒材化」する、といった一連の「表現行為」である。（p. 39）³

本稿では基本的に蒲谷の説明にならって、待遇表現を以下のように規定する。

待遇表現とは、話し手の、聞き手または第三者に対する待遇意識が言語化されたものである。

ところで、待遇意識とは要するに「人に対する敬意・不敬意あるいは親・疎」のことであるのだが、それと待遇表現とが実際の待遇行動において必ずしも一対一の関係をなしているわけではない。例えば「敬」に属する待遇意識が普通

³ 蒲谷（1998：39）では「待遇表現」の代わりに「敬語表現」という用語が用いられている。

体と結びついたり、逆に「不敬」に属する待遇意識が丁寧体と結びついたりすることがしばしばある。普通体あるいは乱暴な言葉づかいであっても、話し手の相手への待遇意識が「敬」あるいは「親」に基づいているのであれば、それは「プラスの待遇行動」と解釈される。逆に待遇表現が非常に丁寧であっても、それが話し手の「不敬」あるいは「疎」の気持ちに根ざしたものであるならば、それは「マイナス的待遇行動」と捉えることができる。⁴

2-2. 待遇表現の下位分類

従来、待遇表現を分類する場合、言語表現形式を基準にしたカテゴリー化が主流であった。以下に示すものは宮地（1999：8）による敬語分類であるが、これもそのような基準に従ったものである。

- 尊敬語：話題のひとやその行為・所有の表現をとおして、話し手はそのひとへの敬意的配慮をあらわす敬語
- 謙譲語：話題の二人のあいだの行為の表現をとおして、話し手はその上位者への敬意的配慮をあらわす敬語
- 美化語：話題のものごとの表現をとおして、話し手が自分の言葉づかいの品位への配慮をあらわす敬語
- 丁重語：話題のものごとの表現をとおして、話し手が聞き手への敬意的配慮をあらわす敬語
- 丁寧語：話し手が、もっぱら聞き手への敬意的配慮をあらわす敬語

本稿では尊敬語、謙譲語、丁寧語などの用語を上る概念規定のとおり用いることにするが、待遇行動に伴う待遇表現の新たな枠を決めることにする。というのも、日本の慣習に従うと「敬意」をもって遇する相手にはいわゆる敬語を用いるわけであるが、そこには必ずしも話し手の相手に対する「尊敬の意」または「謙譲の意」があると言い切れない例が多いからである。本稿では、言語表現形式のいかんにかかわらず、待遇行動にみられる話し手の待遇意識に焦点を当てて以下の〈表1〉に示すように待遇表現の枠を新たに提示する。この表で、新たな待遇表現の下位範疇が実際の言語行動ではどのような言語表現形式であられるのかを示すため、中央の欄に従来の言語表現形式を基準とした分類を、右側の欄にダ・デス・マス・デゴザイマスのいずれを用いるかという文

⁴ 本稿での「プラスの待遇行動」「マイナス的待遇行動」とは、待遇行動を行った結果、それが相手にとって良好な方向に働いた場合は「プラスの待遇行動」とし、その逆の場合を「マイナス的待遇行動」とする。

体的差異を示しておく。

〈表1〉

待遇表現の種類	言語表現形式	文 体
敬意表現	尊敬語、謙讓語、美化語、丁寧語	デゴザイマス、デス・マス
丁寧表現	敬讓語、丁寧語、美化語	デス・マス
中立表現	尊敬語、丁寧語、美化語、普通語	デゴザイマス、デス・マス、ダ
親愛表現	尊敬語、丁寧語、美化語、普通語	デゴザイマス、デス・マス、ダ

このように分類したもののうち、敬意表現とは「話し手が聞き手または第三者に対して尊敬の意、謙讓の意をあらわした表現」である。これは、尊敬語なり謙讓語なりが字義どおりの役割を果たしている場合である。丁寧表現とは、「話し手が聞き手または第三者に対して何らかの配慮をあらわした表現」である。中立表現とは、「話し手が、単に社会的慣習にのっとって、その場面にふさわしいとみなす表現」である。親愛表現は、「話し手が聞き手に対して親愛の情をあらわした表現」である。

これら4つの表現は、それらの間に明確な境界線を引くことが困難である。特に、中立表現はその境界が非常に曖昧であることを認めざるを得ない。例えば、敬意をあらわすために尊敬語を用いるのが日本語世界の慣習であり規範であるとするならば、そのような表現は中立表現とも敬意表現とも言えそうである。本稿では、話し手が真に敬意を込めて尊敬語、謙讓語、丁寧語などを用いた表現を敬意表現と定め、中立表現は慣習化されたルールに従って敬語を用いた表現、つまり話し手の待遇意識に忠実にではなく用いられた場合の表現に限る。⁵

上述のように待遇表現の新たなカテゴリー化を企てたのは、待遇行動にみられる「形式と意識の不一致」が観察される場合、そこに用いられた表現を尊敬語とか謙讓語などと称するのにはいささか無理があるのではないと思われるからである。例えば、次の文を発する場面を想像してみよう。

(1) ただ今、まいります。

⁵ 例えば、夫婦喧嘩の後、妻が夫にバカ丁寧なことばを使うことがあるが、これは当面の話し手である妻にとって「距離をおくべき相手」には丁寧な表現をつかうべきであるという日本語の待遇行動のルールに従った結果である。しかし、その丁寧な表現が話し手の丁寧な待遇意識から出発していないことはいまでもない。本稿では、このように待遇意識と丁寧な表現とされる言語表現形式とが一致しない場合を中立表現とする。

(1)では、「まいる」という謙讓語と「マス」体を用いることによって話し手の「謙讓の意」「丁寧さ」を伝えている。しかし、「ただ今、まいります」を非常に低い声で発話したら、高めの声で発話した場合に比べて「丁寧さ」は伝わりにくくなるだろう。というのも、日本語では発話が丁寧になればなるほどピッチが高くなるように思われるからである。

以上のことを考えると、「待遇表現」論には言語表現形式だけではなくパラ言語表現、および非言語表現を射程に入れたより広い新たな視点が不可欠であることが浮き彫りになる。そして、新たな「待遇表現」論に適合する新たな枠作り、新たなカテゴリー化が必要であることがわかる。以下の2-3. では、本稿で新たに設けた待遇表現の枠とパラ言語表現の一つであるイントネーションの違いがどのような関係にあるのかについての仮説を立てる。

2-3. イントネーションにみられる丁寧さ

荻野・洪(1992)によると、日本人が相手の態度が丁寧かどうかを判断する時、その判断に待遇表現形式の使用の適・不適が関わる比率は32%に過ぎず、残りの68%は声の調子(19%)、または顔の表情・視線のような非言語表現(49%)などに影響されるという。この調査結果は、待遇行動は言語表現形式だけではなくパラ言語表現や非言語表現にも関わる言語行動であることを裏付けている。そしてこのことは、話し手と聞き手があるからこそ行われる待遇行動について考察するには、話し手の言語行動だけではなく聞き手の言語行動(受容、理解)をも同時に観察しなければならないことを示唆するとともに、ルール化された言語表現形式を駆使するだけではなく、その場にふさわしいパラ言語表現や非言語表現を駆使することも話し手にとって必要であることを意味する。

本稿では、パラ言語表現の中のイントネーションに注目し、イントネーションが待遇行動において果たす役割を明らかにしようとする。

イントネーションとは、「発話の中のピッチ(音程)の上がり下がりのうち、話し手の感情や心的態度を反映したもの」(今井1988:44)と定義づけることができる。イントネーションを全く持たない言語はないと今井が指摘しているように、どの言語にもイントネーションは存在する。もちろん、言語行動におけるイントネーションの果たす役割は言語ごとに異なっている。今井(1988)は、日本語におけるイントネーションの役割について次のように述べている。

日本語には、話し手が自分の感情・態度を表現しようとする場合、そのため的手段としてテニヲハを始めとする助詞や「こそ」、「... だけど」など

という言い方、更には敬語などという便利な道具が揃っているので、抑揚に余り頼る必要がない。(p. 45)

日本語においても、しかし、言語表現形式だけでもって円滑なコミュニケーションを営むことには無理があり、イントネーションを始めとするパラ言語表現や非言語表現をその場その場にふさわしく駆使しなければならない。そうしなければ、話し手の意図とはかけ離れたとんでもない誤解を招く恐れさえある。日本語におけるイントネーションの役割についての今井の指摘は英語と比べてのことであり、日本語ではイントネーションを軽視してもよいということではない。このことを、次の(2)の例に即して考えてみよう。

(2) あまりの光栄に胸がはりさけそうなんです。

(映画「サラリーマン専科」より)

これが低い声で発話されたとしてみよう。その場合、話し手が本当に「光栄である」という気持ちでそれを発話したとしても、その気持ちは聞き手に伝わりにくい。それどころか、聞き手に不愉快な思いをさせるかもしれない。日本語は丁寧になるにつれ、声が高めになる傾向があるからであり、⁶一般的に高い声が丁寧であると認識されるからである。

しかし、音声は個人差が激しく、一概に「何々という型が丁寧なイントネーション」と決め付けることは不可能である。音声における個人差は先天的な要因と後天的な要因によって決定されるが、後天的な要因、すなわち音声に関する社会的規範のようなものを明らかにすることは不可能ではない。本稿では、待遇表現の種類とイントネーションとの相関性について、以下のような仮説を立てる。

〈表2〉

待遇表現の種類	イントネーションの質
敬意表現	高めのピッチで推移するイントネーション
丁寧表現	平均的 ⁷ ないしやや高めのピッチで推移するイントネーション
中立表現	平均的ないしやや低めのピッチで推移するイントネーション
親愛表現 ⁸	平均的ピッチで推移するイントネーション、感情に合わせた韻律的特徴

⁶ これはイントネーションの違いだけではなく、声の質、つまり「明るい声」か「暗い声」かによっても異なってくる。

3. 調査方法

3-1. 映画にみられる韻律的特徴

本稿では待遇行動にみられるイントネーションの違いを明らかにするために映画を分析資料とした。韻律的な特徴を明らかにするためには研究対象の音声から自然な会話から採るのが理想的であることはいうまでもないが、本稿の目標である待遇行動と韻律的な側面との相関関係を考察するには映画のことは分析するのがふさわしいと判断した。映画は一連のストーリーから成り立っており、ある人物の待遇行動を観察するには好都合である。また映画を取りあげれば、その人物の待遇意識と待遇表現をはじめ、イントネーションの変化までを考察することができる。映画の選定に際しては、話し手と聞き手との社会的な対人関係が比較的是っきりとあらわれることを基準とし、以下の映画を研究対象として選んだ。なお、音響分析においてはイントネーションにおけるピッチの平均値に的を絞って調査した。

1) サラリーマン専科 (朝原雄三監督)

制作会社：松竹

制作年度：1995年

調査対象：「課長」役の三宅裕司 (男性、当時44歳)

2) ラヂオの時間 (三谷幸喜監督)

制作会社：フジテレビ、東宝

制作年度：1997年

調査対象：「プロデューサー」役の西村雅彦 (男性、当時37歳)

3-2. 音響分析ソフトウェアとその設定

本稿ではSCICON社の音響分析ソフトウェア「Pitch Works」を用いた。音響分析の際の設定は以下のとおりである。

⁷ 「平均的」とは個人によって異なる。つまり、平均的ピッチで推移するイントネーションとは、ある人が普段の声で話したときのイントネーションを意味する。

⁸ 「親愛表現」でのイントネーションは、樋口 (1997) による感情音声、つまり「平静」「怒り」「歓喜」「悲哀」などの声に準ずる。つまり、「怒り」の場合は高めのイントネーションになり、「悲哀」の場合は低めの音声になる。

〈表 3〉

Record	Sample Rate [Hz]	44100
Pitch option	Window length [ms]	35~45
	Step size [ms]	10
	Frequency division [Hz]	50
	Tracking threshold [%]	5~25
	Calculation range [Hz]	50 to 400
FFT option	Display range [Hz]	50 to 400
	Frame Length [pts]	256pts [43Hz]
LPC option	Frequency Range [Hz]	4000
	LPC number of coefficients	12
Spectrogram	Frame Length [Bandwidth]	512pts [21Hz]
	Frequency range [Hz]	4000
	Dynamic range [dB]	40

3-3. 調査結果

まず、「サラリーマン専科」の音響分析の結果について述べる。「課長」役を演じた三宅裕司の台詞⁹は434個で、台詞全体のピッチの平均は223Hzであった。¹⁰三宅のイントネーションは待遇表現の種類に応じて微妙に変化している。聴覚的に、待遇表現の種類によるイントネーションの違いとして最もはっきりあらわれた台詞とそのピッチの平均値を以下の〈表4〉にまとめた。

〈表 4〉

待遇表現の種類	聞き手	台 詞	平均値
敬意表現	社長	あのう、せん、せん、先日は愚弟がお宅へ上がりこんだうえ、	232
		ご挨拶もさしあげませんで、	230
丁寧表現	部長	すみません、ちょっと失礼します。	228
中立表現	社長	はい、ありがとうございます。	166
		光栄のいたりです。	155
親愛表現	妻	はい。はい、すぐに行きます。	195
		なにみみっちいこと言ってるんだよ。もう小心者だなあ。	221

⁹ 台詞は文または句で区切った。文または句で統一できなかったのは、音響分析にあたっての台詞の長さを調整するためである。

¹⁰ 本稿ではピッチの平均を抽出するにあたって「怒り」の音声は除外した。こうしたのは、

この分析結果からわかるように、敬意表現におけるピッチは高い。しかしピッチの平均値が高めになったのであって、全ての敬意表現のピッチが高いわけではない。ところで、発話のピッチが平均値より非常に高い場合は、話し手の聞き手に対する下心、つまりゴマスリの気持ちが発話者の根底にありそうである。以下の〈表5〉にあげる数値は「課長」の「社長」に対する台詞とそのピッチの平均値だが、取りあげた台詞の前後関係から「課長」が「社長」に宇義どおりの「尊敬の意」よりは、自分の存在をよりアピールしようとする下心が読みとれる。

〈表5〉

聞き手	台詞	平均値
社長	どうも、失礼します。	260
	いいえ、とんでもありません。	260
	はい、え、あ、昼頃無事つきました。	270
	お待たせしました。	281
	失礼します。	260

上に示した二つの分析結果からうかがえることは、イントネーションの平均ピッチが話し手の聞き手に対する待遇意識の度合いを示している、ということである。「サラリーマン専科」は風刺的内容を持った映画であり、三宅の待遇行動には誇張性がある。そこには当然、そのイントネーションにも誇張性が現れてくるわけであり、その誇張された台詞から、待遇行動にみられるイントネーションの特質を明らかにすることができる、格好の材料を与えてくれる。

次に、「ラヂオの時間」における平均ピッチの差について述べる。「ラヂオの時間」で「プロデューサー」役を演じた西村雅彦の声は先の「課長」役の三宅裕司のそれに比べると声はやや低目である。イントネーションの平均ピッチの差は「サラリーマン専科」の場合とは若干の違いが認められるものの、全般的な傾向は以下の〈表6〉に示すとおり変わらない。西村雅彦の台詞は308個で、台詞全体のピッチの平均は167Hzであった。

「待遇意識」の違いによって異なるイントネーション、特に目上の人に対するイントネーションを特徴づけることに本稿の目的があるからである。北原・東倉(1988)によると、「怒り」の音声は、「平静」「歓喜」「悲哀」の音声に比べて高くなるのが一般的である。なお、ピッチの平均値は小数第1位を四捨五入した。

〈表6〉

待遇表現の種類	聞き手	台 詞	平均値
敬意表現		該当例なし	
丁寧表現	声優A	26度が基本ですか。	169
中立表現	作家先生	お願いできますか。	148
	声優B	大変申し訳ないんです。	150
	声優の マネージャー	そうだったんですか。	136
親愛表現	部下の 女子社員	長井、あついコーヒーくれ。	165
		いいから、コピーして来なさい。	170

〈表6〉に示したように、「プロデューサー」の台詞には敬意表現が見当たらない。したがって、敬意表現の平均ピッチを抽出することができなかったわけであるが、丁寧表現、中立表現、親愛表現に関しては、その平均値の順位が〈表4〉の場合と同じである。ところで、「ラヂオの時間」の「プロデューサー」の台詞にも上司に対して機嫌をとっているものがあり、そのピッチの平均値は次の〈表7〉のとおりである。

〈表7〉

聞き手	台 詞	平均値
上司	いい薬ありますよ。	195
	なんとかします。	183

また「プロデューサー」は、機嫌をとらなければならない主演の「声優」らに対しても平均的ピッチより高めの声で対応している。このことは次の〈表8〉から明らかである。

〈表8〉

聞き手	台 詞	平均値
主演女優	ノックさーん、もう、お疲れさまでございました。	234
	もう、作家の先生がおっしゃるんですから、間違いないですよ。	282
	なんとかしましょう。	234
	ノックさーん、やっぱりラストは一人でたたずみますか。	257
声優全員	台本に若干の差し替えがあります。	195
作家先生	先生、お願いします。	235

以上の分析結果から明らかなように、話し手がより丁寧な待遇行動をとる際には韻律的な変化も生じる。つまり、丁寧な待遇行動にみられるイントネーションの平均ピッチは普段のイントネーションより高めになるのである。そして、言語表現形式は丁寧であっても字義どおりの待遇意識を話し手が持っていない場合には、イントネーションの平均ピッチは低くなる。しかし、ピッチが高いことが全て丁寧であることにつながると限らない。普段よりピッチが際立って高くなる場合には、丁寧さよりは下心が話し手にあると言えそうである。

それにしても、映画の音声は作られたシナリオの中に存在するものであり、「自然な発話」ではないという弱点を有する。そこで次に、映画にみられた韻律的な特徴が日常会話にも観察されるかどうかを検証するために行った実験について述べる。

3-4. 実験

この実験では以下の場面を設定し、被験者から音声を収録した。音声の収録にあたっては、被験者に何も告げず、場面だけを提示して発音するよう指示した。そして次に、全く同じ場面において「敬意を抱いて」という条件下と「敬意を抱かずに」条件下で発音するよう指示した。

◇ 下線の箇所を発音してください。

① 「ありがとうございました」

教頭「この前、話した校舎の増築の件、事務長が県の建築課に行つて来たそうだよ。」

学校事務員「ああそうですか。ありがとうございました。」

② 「お手数かけました」

先生「君、次回の会議は来週の火曜日に入れておいたからね。」

助手「ああそうですか。お手数かけました。」

③ 「これはどうもすみません」

課長「君の担当の顧客リストを机の上に置いといた。宜しく。」

主任「ああ、これはどうもすみません。」

④ 「こちらこそ、宜しくお願いします」

先輩先生「先生、来年は、僕の代りに野球部の顧問をやってくれないかね。お願いするよ。校長にも言っておくから。」

後輩先生「そうですか。分かりました。こちらこそ、宜しくお願いします。」

⑤ 「いいですよ。私がやっております」

校長「夏休み中は日直の先生が戸締りをする事になっているけど、気がついたら先生の方でもやっていただけませんか。」

教頭「ああ、いいですよ。私がやっておきます。」

被験者¹¹は、1) 年齢:30～45代、2) 社会経験を有することをその条件とした。年齢に制限を加えたのは映画でみられたイントネーションとの違いがあらわれるかどうかを調べるためであり、社会経験を重視したのは、被験者が社会における対人関係について十分な知見を有していることが望ましいと考えたからである。被験者は5人であり、すべて男性の日本語母語話者である。音声の収録は録音室でDATおよびMDレコーダーを用いた。音響分析は3-2.で紹介した音響分析ソフトウェアを用い、先の〈表3〉に提示した設定で行った。以下の〈表9〉は音響分析の結果である。

〈表9〉

①ありがとうございました。

被験者	NORMAL ¹²	POLITENESS	NON-POLITENESS
A	133	155	137
B	122	156	134
C	135	142	139
D	114	116	132
E	144	134	126

②お手数かけました。

被験者	NORMAL	POLITENESS	NON-POLITENESS
A	153	151	141
B	135	134	137
C	148	154	133
D	106	134	142
E	158	142	164

¹¹ 被験者A・B・Dは愛知県存在者、被験者C・Eは三重県存在者だが、本稿では被験者の「方言差」を考慮外とした。

¹² 「NORMAL」とは提示された場面に合うように発音した場合である。

③これはどうもすみません。

被験者	NORMAL	POLITENESS	NON-POLITENESS
A	153	183	161
B	138	150	149
C	167	169	141
D	137	128	143
E	160	179	179

④こちらこそ、宜しく申し上げます。

被験者	NORMAL	POLITENESS	NON-POLITENESS
A	143	156	130
B	129	153	127
C	113	136	113
D	115	126	111
E	151	152	135

⑤いいですよ。私がやっておきます。

被験者	NORMAL	POLITENESS	NON-POLITENESS
A	155	182	155
B	135	165	141
C	169	159	153
D	125	132	126
E	155	163	136

これらの表からわかるように、ピッチの平均値は「敬意を抱いて」発話する時に高めになる傾向がある。¹³この点は、映画における敬意表現のピッチの平均値の特徴と等しい。しかし、被験者Eの場面①をはじめいくつかに関しては仮説に反する結果もでた。したがって〈表9〉の音響分析結果は、次の〈表10〉に示すとおり、本稿の仮説を部分的に正当化するものである。

¹³ 「POLITENESS」のところでは高めの平均ピッチが現れた発話は25個の中で17個であるが、これは「NORMAL」が3個、「NON-POLITENESS」が6個に比べると、その比率が高い。

〈表10〉

場 面	音響分析の結果
④ こちらこそ、宜しくお願いします。	仮説のとおり、敬意を抱いて行う発話はイントネーションが高めになった。
① ありがとうございました。 ③ これはどうもすみません。 ⑤ いいですよ。私がやっております。	十分に明確ではないが、仮説を裏付ける結果があらわれた。
② お手数かけました。	仮説に反する結果があらわれた。

被験者Eの①、被験者A、B、Eの②、被験者Dの③、被験者Cの⑤の場面であられた平均ピッチの違いは仮説に反している。特に、場面②の「お手数かけました」における平均ピッチの違いは、仮定から大いに外れた。これらの原因は、発話文の特徴、話し手の個人差によるものであると考えられる。場面②の発話文の特徴、つまり結果として目下の人が目上の人に「迷惑をかけてしまった」「やるべきことをやってもらった」という話し手の心理状態がイントネーションに影響を及ぼしたものと考えられる。③の「これはどうもすみません」を低く発話した被験者Dについても、分析結果は場面②でのEのそれに等しい。被験者Eの①とCの⑤の結果は、話し手の個人差によるものと考えられる。音声の収録の後に簡単なインタビューを行ったが、被験者の多くの意見は場面設定が目上と目下になっていて、「ノーマルに」のところで既に「敬意を抱いて」発音した、とのことであった。このことは、被験者Eの①とCの⑤の「ノーマルに」のイントネーションは、「敬意を抱かずに」のイントネーションよりは高めであることからもうかがえる。

以上のように、音響分析の結果は仮説に反する例がいくつかあるものの、全体としては仮説の正しさを裏付けるものである。

4. 結論

本稿は、日本語の待遇行動にみられる韻律的特徴を明らかにするために、イントネーションに注目し、待遇表現の種類によるイントネーションの違い、その中でも特にピッチに注目して音響分析を行った。

これを行うために、社会的な対人関係が鮮明にあらわれた映画作品「サラリーマン専科」と「ラヂオの時間」の二本を取りあげた。「サラリーマン専科」では「課長」役を演じた三宅裕司と、「ラヂオの時間」では「プロデューサー」役を演じた西村雅彦の音声进行分析対象とした。音響分析はSCICON社の音響分析ソ

フトウェア「Pitch Works」で行った。

音響分析の結果、イントネーションの平均ピッチが待遇表現の種類により次のように異なることが判明した。

- ① 本稿でいう丁寧表現を用いる場合、すなわち字義どおり丁寧に相手に遇しようとする場合にはイントネーションが高めになる。一方、中立表現を用いる場合、つまり敬語を単に社会的習慣に従って用いる場合にはやや低めになる。
- ② イントネーションが非常に高くなる場合には、話し手の下心がそこに潜んでいる可能性がある。

また本稿では、映画にみられるイントネーションの違いを裏付けるために、被験者に、同一場面の同一表現を「ノーマルに」「敬意を抱いて」「敬意を抱かずに」の三つの条件下で発音してもらった。音声の収録後、映画の音響分析と同様の方法で音響分析を行った結果は〈表9〉にまとめた。

以上、本稿では、日本語の待遇行動におけるパラ言語表現がコミュニケーションの円滑さを左右すると同時に、待遇行動の基盤をなす待遇表現の考察にはパラ言語表現の要素を取り入れた新たな枠が必要不可欠であることを明らかにした。

今後の課題として残されたものは非常に多い。待遇行動にみられるパラ言語表現はイントネーションだけではなく、F0の上がり目・下がり目、発話速度、発話の強さ、および声の明るさ、暗さなども考察の項目に取り入れなければならないと考える。また、発話文の特徴によるイントネーションの型も新たに体系化しなければならない。

参考文献

- 今井邦彦 (1988) 「イントネーションの表現力」『言語』Vol. 17, No. 3 大修館
- 荻野綱男・洪 珉杓 (1992) 「日本語音声の丁寧さに関する研究」『日本語イントネーションの実態と分析』国広哲弥 (編) 科学研究費報告書
- 蒲谷 宏・川口義一・坂本 恵 (1998) 『敬語表現』大修館書店
- 北原義則・東倉洋一 (1988) 「音声の韻律情報と感情表現」『電子情報通信学会技術研究報告』
- 杉藤美代子 (1992) 「イントネーションの記号論」『文化言語学 その提言と建設』三省堂

- 辻村敏樹 (1992) 『敬語論考』 明治書院
- 樋口宜男 (1997) 「音声表現に現れた話者の感情」『日本語学』 vol. 16、No. 10
明治書院
- 洪 珉杓 (1993) 「丁寧表現における日本語音声の丁寧さの研究」『音聲學會會報』 第204号
- 宮地 裕 (1999) 『敬語・慣用句表現論』 明治書院
- 吉岡泰夫 (1986) 「高校生の敬語知識とその形成要因— 済々高・人吉高・九女高における敬語行動調査から—」『計量国語学』 15巻 6号 計量国語学会編
- (1999) 「対話インターアクションとしての敬語行動」『談話のポライトネス』 第7回 国立国語研究所 国際シンポジウム